

全日本マスターズ陸上競技選手権大会参加者の 競技志向に関する研究：参加者のスポーツ価値意識に着目して

逢坂十美*, 藤原健固**

A Study of the competition-oriented of the Participants of ALL JAPAN MASTERS'
TRACK AND FIELD CHAMPIONSHIPS : The Value orientation in sports among the
participants.

Tomi OSAKA and Kengo FUJIWARA

Abstract

The object of this study is to discuss the significance of and the issues facing All Japan Masters' Championships ("Masters", hereafter), and to examine the possibility of promoting sports as a middle-and-advanced-age group activity. The participants' orientation for sports has been analyzed for the purpose.

The analytical framework is based on Uesugi's scheme proposed for classifying value/orientation in sports. It has 2 axes. This study uses one of them, the axis of "repressive/gratifying" attitude toward sports. "Repressive attitude values winning highly, and consequently disciplines athletes to train rigorously, repressing their desire to avoid hard training". As against this, "gratifying attitude" satisfies "immediate recreational pleasure such as enjoying sports within one's capacity and/or seeking physical pleasure of exercising, without worrying about winning."

The data were obtained through questionnaires, distributed to all the 1500 participants of the 16th All JAPAN MASTERS' TRACK-AND-FIELD CHAMPIONSHIPS held in October 1995. The response rate was 48.5 percent. The major findings are as follows :

- 1) The participants can be put into four groups : first, playing sports with diligence for a long-term goal ; third, playing sports both for enjoyment and for a worldly goal ; and fourth, playing for none of the above goals.
- 2) More participants were enjoyment-oriented than competition-oriented.
- 3) More female than male participants were enjoyment-oriented.
- 4) No relationship existed between age and value-orientation-in-sports among participants. Participants of the above 40-year-old generations were more enjoyment-oriented than competition-oriented.

"Masters" has been managed strictly to ensure a high level of quality, It has the characteristics of individual competition in Track-&-Field events. The physical conditions of middle-and-advanced-age

*四国学院大学社会学部, **教授

groups have been taken care of in its rules. These could be the reasons for attracting "Masters" participants from not only the competition-oriented group, but also the enjoyment-oriented group. The above findings suggest, that in the aging society, sports for middle-and-advanced-age groups need flexibility in order to accommodate people with varied values for and attitude forwards sports.

はじめに

中高年者^{注1)}のスポーツ活動は近年、多様化の様相を呈してきたといわれている。テニス、水泳、陸上競技などのマスターズスポーツも多数の参加者を集めており、日本体育協会は現在、中年以上による総合スポーツ大会として「マスターズ国体」を開催する構想を明らかにしている(四国新聞; 1998年7月16日)。

マスターズスポーツについては、これまで「記録への挑戦や他人との勝敗を競い合うことを目的として」(高橋^{注2)})行なわれるスポーツ競技会と捉えられてきた。そして、「マスターズ国体」が「競技志向の中高年スポーツ愛好家の受皿」とされていることから明らかなように、マスターズスポーツ参加者は「競技志向」とであると捉えられている。

確かに、全日本マスターズ陸上競技選手権大会^{注2)}(以下、マスターズ陸上)は、スポーツ競技会の定義や目的に合致する。つまり、それは最優秀者を「異論のないように選出し公認する」(生沼^{注3)})ことを目的として「一定の時間や期間、一定の場所に競技者を集め、優劣の順位を決定するためお互いの技能を競い合う」(生沼^{注3)} p.42)行事である。したがってマスターズ陸上を中高年者によるスポーツ競技会と捉えることは妥当であろう。しかし、その参加者を一概に「競技志向」とであると捉えることができるだろうか。

樋口^{注4)}によれば、継続的にトレーニングを実施している高年長距離ランナーの場合、運動能力の低下傾向は緩やかであるものの、加齢にともなう持久力の低下から逃れることはできない。このように身体的制約を受けざるをえない中高年者が、マスターズ陸上参加に際してスポーツの勝利獲得や記録更新といった側面のみを強く

志向しているとの捉え方には疑問が残る。また一般に中高年者は、その経験や価値観の多様性から、スポーツへの取り組み方も多様であると考えられる。したがってスポーツ競技会として開催されているマスターズ陸上の参加者が競技志向であると容易に判断できないであろう。

「マスターズ国体」が高齢社会における重要な大会として期待されるなか、マスターズ陸上参加者が抱えているスポーツ価値意識に注意を向けることなく、彼らが競技志向であるとの認識のもとに大会が提供されるならば、大会の意義そのものが問われることになるであろう。

以上の観点から本稿においては、マスターズ陸上参加者が競技志向であるか否かをスポーツ価値意識^{注3)}から検証し、彼らがマスターズ陸上のどのような特性に惹かれているのかを明らかにする。それによって高齢社会におけるマスターズ陸上の意義と課題を明らかにし、中高年スポーツの可能性を探る一助とすることを目的とする。

I. 視点

1. 先行研究

マスターズスポーツは、当初、臨床医学、運動生理学の領域で関心がもたれ、継続的にトレーニングを積んだ中高年者の身体的特徴を明らかにし一般中高年者のトレーニング実施の在り方や中高年者の体力の可能性を探ることを目的として研究されてきた。また、スポーツ心理学の領域では、ホーガン(Hogan^{注5)})が高年者においても水泳プログラムの参加によって自己効力感(Self-Efficacy)が増加しうることを明らかにし、秦泉寺^{注6)}はマスターズ陸上参加者の「主観的幸福感」を測定し、彼らが自立した幸福な老年期を迎えていることを明らかにしてい

る。

スポーツ社会学領域においては、佐竹³⁰⁾ やヘイスティングス (Hastings⁶⁾) のようにマスターズスイミングへの参加目的や参加動機に着目したものがみられ、参加者の多くが勝利獲得や記録更新のみを目的として参加しているのではないことを明らかにしている。しかしながら、マスターズ陸上およびその参加者に関するスポーツ社会学領域での体系的な研究は多くなされていない。

一方、スポーツ価値意識研究はこれまで、上杉³⁶⁾⁻⁴⁰⁾、川辺¹²⁾、丸山¹⁸⁾、今村⁹⁾、小椋ほか¹⁶⁾、多田納³³⁾、浅沼¹⁾²⁾といった多くの研究者によってなされてきた。

このうち小椋ほか¹⁶⁾ は、中学生と成人を対象に勝利志向と加齢および他の関連要因の検証を行ない、また今村⁹⁾ は、競技者のスポーツ種目による価値意識の違いと日本の特徴を明らかにしている。しかし、これらの研究はスポーツ価値意識から日本のスポーツの特徴を明らかにすることが目的であり、対象も若年層に限られていたために中高年スポーツ参加者がスポーツのどのような側面を志向しているかについての解明はなされなかった。

上杉³⁶⁾⁻⁴⁰⁾ は、日本人のスポーツ行動がその目的・方法等において多様化している現状を整理するため、分析枠組みとしてスポーツ価値意識の四類型を構築し、一流競技者とその指導者、地域スポーツ参加者とその指導者など、スポーツ階層によるスポーツ価値意識の特徴を明らかにしている。さらに、浅沼¹⁾²⁾ は大学スポーツの競技レベルのアップを目的として上杉の分析枠組みを用いて体育専攻学生のスポーツ価値意識を検証している。

2. 分析枠組み

上杉³⁶⁾⁻⁴⁰⁾、浅沼¹⁾²⁾ の一連の研究は、一般のスポーツ参加者のスポーツ行動が多様化する現状をスポーツ価値意識の分析することによって明らかにできることを示している。そこで本稿では、上杉が構築したスポーツ価値意識の四類型を分析枠組みとして援用する。

スポーツ価値意識の四類型とその内容は、図1に示すとおりである。本稿ではこれらをそれぞれⅠ型、Ⅱ型、Ⅲ型、Ⅳ型と表記する^{註4)}。そしてスポーツ価値意識の四類型は、スポーツの意義づけ方に関する軸とスポーツの取り組み方に関する軸の二つの軸によって構築されている。

まず、スポーツの意義づけ方に関する軸の両極には「手段性志向」と「自己目的性志向」が対置するとされた。「手段性志向」は、「スポーツがある特定の目的（健康増進、性格育成など）に対して持っている機能的意味だけを認めようとする意識」であり、スポーツを「手段的に意義づける志向」（上杉³⁷⁾ p.7）とされた。これに対して「自己目的性志向」は、「スポーツを何かの目的の手段と特定しないで、スポーツそれ自体を目的に行おうとする意識」であり「スポーツそのもののなかに意義を見いだす志向」（上杉³⁷⁾ p.7）とされた。

一方、スポーツへの取り組み方に関する軸の両極には「禁欲性志向」と「即時性志向」が対置するとされた。「禁欲性志向」は、「勝利獲得や記録の達成を何よりも評価し、そのためにたちどころの欲求充足（厳しい鍛練を避けようとする欲求）を抑えて鍛練を積み重ねようとする意識」（上杉³⁷⁾ p.5）であり、勝利のために禁欲する志向とされた。これに対して「即時性志向」は、「勝利の獲得や記録の達成という評価にとらわれずに、現在の自己の能力でできる範囲で気軽に楽しんだり、身体を動かす楽しさを味わおうとする意識」（上杉³⁷⁾ p.5）であり、スポーツ活動への欲求を即時的に充足する志向とされた。

上杉³⁸⁾、浅沼¹⁾²⁾ は、「禁欲性志向」と「即時性志向」、「手段性志向」と「自己目的性志向」の二軸の妥当性を検証し、それぞれ一対のものであることを裏付けた。これは「禁欲性志向－即時性志向」、「手段性志向－自己目的性志向」（以下、二軸それぞれを「禁欲－即時」、「手段－目的」と表記する）のそれぞれ二軸を、独立した軸として分析枠組みに用いることができることを示している。

マスターズ陸上参加者のスポーツ価値意識の

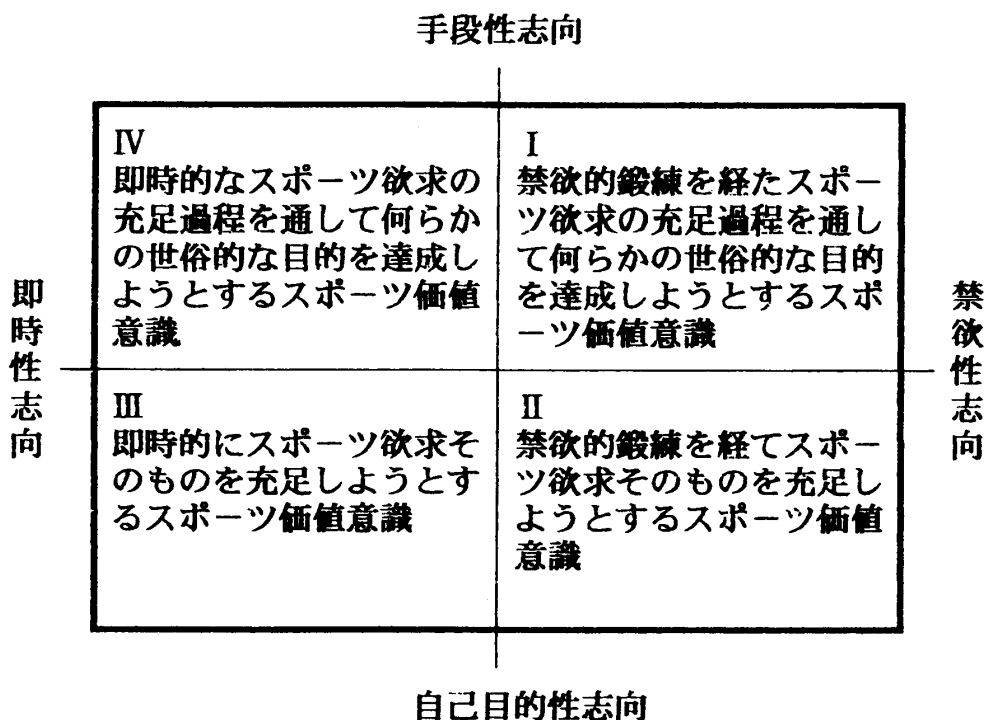


図1 スポーツ価値意識の四類型 (上杉, 1986)

特徴は、スポーツ価値意識の分布傾向によって整理することが可能であり、さらにスポーツの取り組み方の軸である「禁欲-即時」を分析することによって競技志向の検証が可能であると考える。

3. 研究方法

- 1) マスターズ陸上参加者に対してスポーツ価値意識に関する調査を実施し、得られた結果を統計的に分析し、競技志向の検証を行う。
- 2) 考察にあたっては、日本マスターズ陸上競技連合発行の会報に掲載されたマスターズ陸上参加者による寄稿を参考にする^(注5)。

II. 全日本マスターズ陸上競技選手権大会参加者のスポーツ価値意識

1. 第16回全日本マスターズ陸上競技選手権大会参加者に対する調査とサンプル特性

調査は1995年10月8日から10日までの期間、神奈川県平塚市で開催された第16回全日本マスターズ陸上競技選手権大会の参加者1500名全員に対して実施した。調査票は参加者全員に現地

にて配布し、現地回収および一部郵送による回収を行なった。調査票の配布数は1500部、回収数は726部 (50.4%)、有効サンプル数は728 (48.5) であった。

得られたサンプルの性別および年齢別については、表1に示したとおりである。性別では男性が627名で全体の86.2%、女性は100名で全体の13.8%であった。年齢別では、男性は60歳代が男性全体の27.8%、女性は40歳代が女性全体の33.0%でそれぞれ最も高い値を示した。なお、平均年齢は男性が56.5歳、女性が49.9歳、全体では55.6歳であった。S. D. は男性が12.9、女性が10.5、全体では12.8であり、女性が男性より

表1 サンプルの社会的属性

	男性	女性	合計
30歳-39歳	65 (10.4)	18 (18.0)	83 (11.4)
40歳-49歳	125 (19.9)	33 (33.0)	158 (21.7)
50歳-59歳	163 (26.0)	31 (31.0)	194 (26.7)
60歳-69歳	174 (27.8)	13 (13.0)	187 (25.7)
70歳以上	100 (15.9)	5 (5.0)	105 (14.4)
合計	627(100.0)	100(100.0)	727(100.0)

N. A. = 1

もやや低い年齢層に集中していることが示された。

調査項目とその内容は表2に示したとおりである。このうち「スポーツ価値意識要因」は、上杉³⁹⁾⁴⁰⁾が作成した質問内容を本調査においても採用した。それぞれの軸に対置する二つの志向をA, Bとし, 「Aを大切にしたい」「どちらかといえばAを大切にしたい」「AもBも両方大切にしたい」「どちらかといえばBを大切にしたい」「Bを大切にしたい」の5段階尺度により回答をもとめた。なお「AもBも両方大切にしたい」によって得られた結果は, 二軸それぞれの中間の志向である。これは上杉³⁷⁾, 浅沼²⁾の研究においてもあらわれた志向であり, 本稿においてもこの志向の存在を無視できないとの立場から「中庸型」として扱った。

また, 「スポーツ意識」について上杉は「ある意識内容を知るためには, どのような下位意識によって構成されているかを明らかにする必要がある」(上杉⁴⁰⁾ p.4)としている。本稿においても, 「スポーツ意識」をスポーツ価値意識の下位意識と捉え, 14項目を設定した^{注6)}。各スポーツ意識について「賛成」「どちらともいえない」「反対」の3段階尺度により回答をもとめ, スポーツに対する取り組み方の軸である

「禁欲志向」「中庸型」「即時志向」のそれぞれがどのような意識内容で構成されているかを分析するために用いた。

分析手順は以下のとおりとする。

- 1) マスターズ陸上参加者のスポーツ価値意識の四類型における分布の偏りを「禁欲-即時」, 「手段-自己目的」のクロス集計により検証する。そして, スポーツ価値意識の特徴を明らかにするために, 上杉⁴⁰⁾による一流競技者, 地域スポーツ参加者それぞれのスポーツ価値意識結果との比較を行う。
- 2) 「禁欲」「中庸型」「即時」それぞれの志向とスポーツ意識の各項目についてクロス集計およびカイ自乗検定を行い, 関連性の認められたものについては残差分析を行なう。さらに, 3つの志向と性別, 年齢別それぞれについてクロス集計およびカイ自乗検定を行なう。

2. スポーツ価値意識の分布傾向

マスターズ陸上参加者のスポーツ価値意識の分布を表したものが, 図2である。

四類型のなかで最も高い値を示したのはⅡ型(123名, 16.9%)であった。このスポーツ価値意識は「禁欲性志向」と「自己目的性志向」によって構成された「禁欲的鍛錬を経てスポーツ

表2 調査項目

【調査項目】	質問内容
【スポーツ価値意識】	
A・Bのうち, 今のあなたはどちらを大切にしたいですか?	
禁欲志向:	A. 能力の向上をめざし, 厳しい練習の中で自分を鍛えようとするやり方
即時志向:	B. 現在の自分の能力に合わせて気軽に行なうやり方
【スポーツ意識】	
精神重視:	1. スポーツでは技術や体力よりも精神力を大切にす
鍛錬重視:	2. スポーツでは技術の向上をめざして厳しく鍛錬する
自己実現重視:	3. スポーツで行なうこそによって自己実現をはかりたい
努力重視:	4. スポーツでは結果よりもそれまでの努力を大切にす
気軽さ重視:	5. スポーツでは気軽さをもって行ないたい
継続重視:	6. スポーツをするにあたってはひとつの種目を継続したい
勝利重視:	7. 試合をする限りはどこまでも勝利をめざすべきだ
健康重視:	8. スポーツは心身の健康の保持・増進を目的として行ないたい
スポーツ中心:	9. 食事や睡眠など日常生活はスポーツを中心に考える
社交重視:	10. スポーツを通して多くの人と出会いたい
自由主義:	11. スポーツは多くの仲間とするよりも一人で自由に行ないたい
非日常志向:	12. スポーツは仕事や家庭などの日常を忘れて行ないたい
自己顕示志向:	13. スポーツをしている姿をだれかに見てほしい
無理志向:	14. スポーツでは少々の無理は仕方ない
【社会属性】	
性別:	あなたは男性ですか, それとも女性ですか
年齢:	あなたの満年齢はいくつですか

欲求そのものを充足しようとする意識」である。ついでⅢ型 (101, 13.9), Ⅳ型 (67, 9.2) の順であった。これら二つの意識はともに「現在の自己の能力でできる範囲で気軽に楽しんだり, 身体を動かす楽しさを味わおうとする志向」である「即時性志向」で構成されている点で共通しているが, 「手段-自己目的」の軸, すなわち「スポーツの手段的側面に意義を見出す志向」か「スポーツそのものの楽しさに意義を見出す志向」かという点において異なっている。なお「禁欲的鍛錬を経たスポーツ欲求の充足過程を通して何らかの世俗的な目的を達成しようとする意識」であるⅠ型は少数 (13, 1.8) にとどまった。また, 「中庸型」は, 全体で423(58.2)と高い値を示した。

以上のことからマスターズ陸上参加者は, 「禁欲的鍛錬を経てスポーツ欲求を充足しようとするスポーツ価値意識」, 「即時的なスポーツ欲求の充足過程を通して何らかの世俗的な目的を達成しようとするスポーツ価値意識」, 「即時的にスポーツ欲求そのものを充足しようとするスポー

ツ価値意識」, さらに「これらのいずれにも属さないスポーツ価値意識」によって構成されているといえよう。

上杉⁴⁰⁾によれば, 一流競技者はⅠ型のスポーツ価値意識に一元化されており, 地域スポーツ参加者は, Ⅲ型とⅣ型が高い値を示したとしている。

マスターズ陸上参加者のスポーツ価値意識の分布傾向は, Ⅱ型が最も高い値を示した点で一流競技者の支持する意識と類似しており, またⅢ型が比較的高い値を示した点で地域スポーツ参加者の支持する意識と類似している。しかしながら一流競技者において高い値を示したⅠ型がマスターズ陸上参加者ではごく少数であり, また地域スポーツ参加者において最も高い値を示したⅣ型に対して, マスターズ陸上参加者ではⅢ型の値が最も高かった。したがって, マスターズ陸上参加者のスポーツ価値意識は一流競技者, 地域スポーツ参加者のいずれとも異なる分布が示されたことになる。

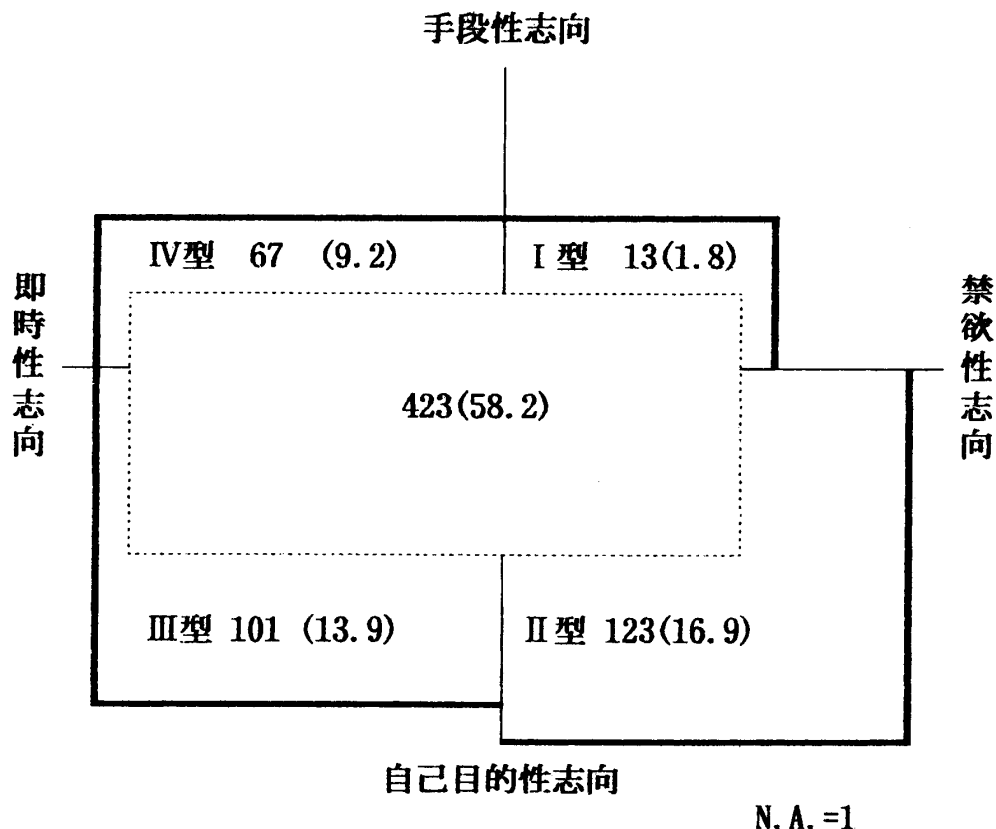


図2 第16回全日本マスターズ陸上競技選手権大会参加者のスポーツ価値意識分布

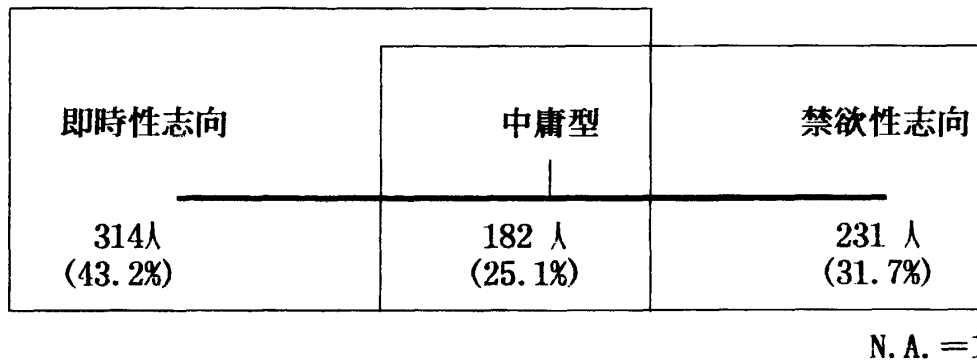


図3 第16回全日本マスターズ陸上競技選手権大会参加者のスポーツ価値意識（「禁欲－即時」志向）

3. 全日本マスターズ陸上競技選手権大会参加者の競技志向に関する検証

マスターズ陸上参加者のスポーツ価値意識分布を「禁欲性志向」「中庸型」「即時性志向」（以下、3志向と称する）の軸によって示したものが図3である。その結果、「禁欲性志向」231名（31.7%）、「即時性志向」314（43.2）であり「中庸型」182（25.1）であった。「禁欲性志向」より「即時性志向」がわずかに高く、「禁欲性志向」への偏りはみられなかった。

3志向とスポーツ意識とのクロス集計およびカイ自乗検定を行った結果、図4-Aに示した4項目、すなわち「鍛練重視」「勝利重視」「スポーツ中心主義」「気楽さ重視」に関連性が認められた。さらに、表3に示したとおり残差分析を行った結果、「鍛練重視」「勝利重視」「スポーツ中心主義」の3項目は「禁欲性志向」に肯定の割合が高く、「気楽さ重視」は「即時性志向」に肯定の割合が高かった。このことから、「禁欲性志向」は日常生活をスポーツ中心に考え、技術の向上と勝利をめざすスポーツ意識に裏づけられた「競技志向」であり、「即時性志向」はスポーツを気楽に楽しもうとするスポーツ意識に裏づけられた「気楽さ志向」であるといえる。

マスターズ陸上においては、「競技志向」の参加者が存在し、秦泉寺¹¹⁾が述べているように、中高年スポーツにおける競技性の保証の必要性が本稿においても示されたが、同時に、「気楽さ志向」をもつ参加者が「競技志向」よりも高い割合で存在した。このことは、日米のマスター

ズスイミングにおいて勝敗や記録を重視する参加者のほかに手軽さや娯楽性を追求する参加者が存在することを明らかにした佐竹³⁰⁾の研究や、カナダとアメリカのマスターズスイミング参加者の参加動機として「達成感」や「技術の向上」のほか、「社交性」「フィットネス」「楽しみ」「ストレス解消」の因子を取り出せたとするヘイスティングス（Hastings⁶⁾の研究と共通するものである。

つぎに、3志向と性別、年齢別との関連性について検証した結果は図4-Bに示したとおりである。その結果、性別との関連性が認められた。すなわち、女性の方がわずかに「即時性志向」へ偏る傾向が認められ、男性よりも女性に「気楽さ志向」が高いことが示された。

一方、3志向と年齢については、関連性は認められなかった。当初、世代間の違いによって価値観が異なり、それによってスポーツ価値意識も異なるものと思われたが、40歳以上ではいずれの年齢層においても「禁欲性志向」より「即時性志向」の参加者がやや高い割合で存在していることが明らかとなった。そして、高年者において中年者とほぼ同じ割合で「競技志向」の参加者が存在することが示された。

以上のスポーツ価値意識の結果から、マスターズ陸上参加者像を次のように描くことができる。

- 1) マスターズ陸上参加者は、禁欲的鍛錬を経てスポーツ欲求そのものを充足しようとするグループ、即時的にスポーツ欲求そのものを充足しようとするグループ、即時的なスポー

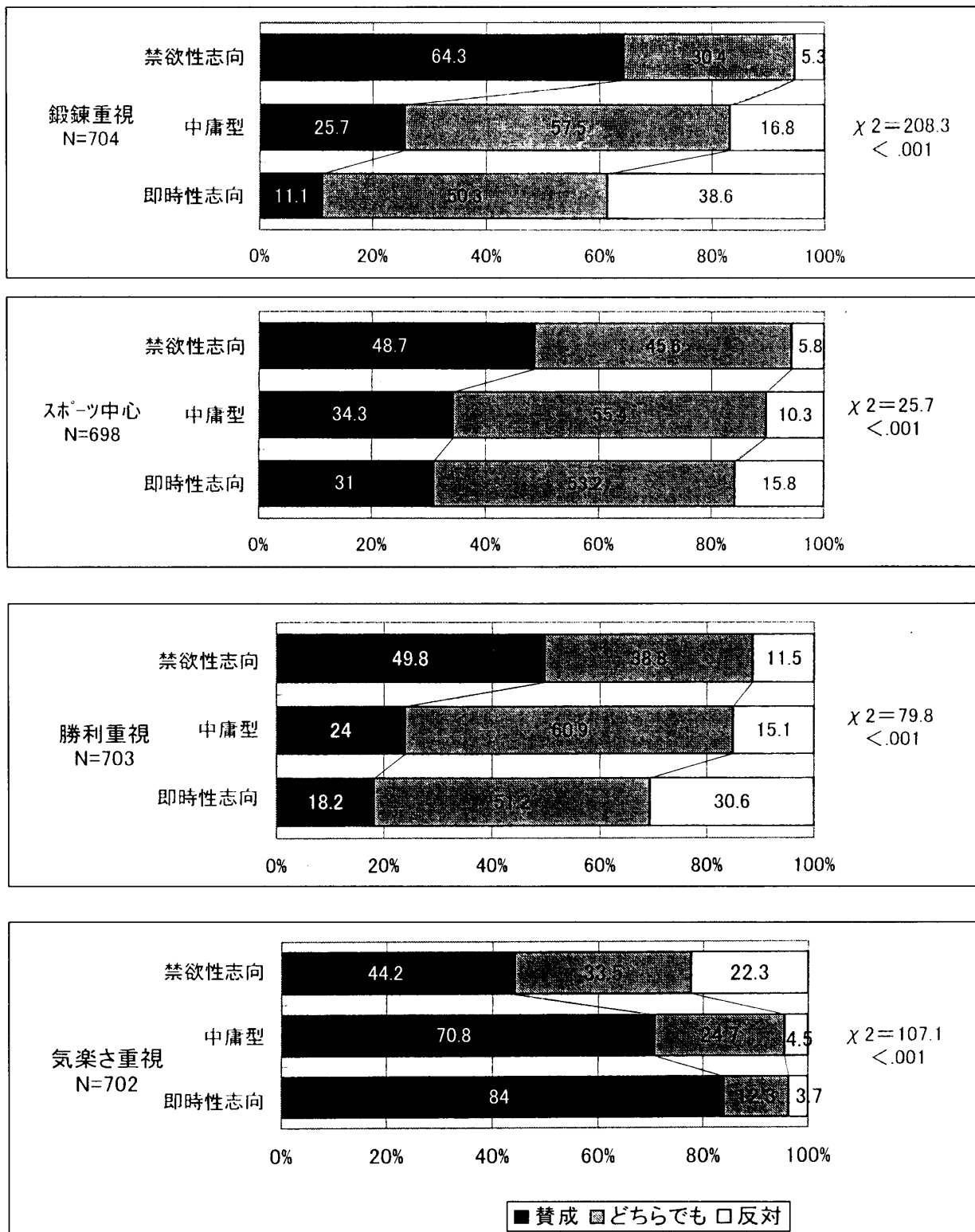


図4-A 「禁欲-即時」と各スポーツ意識のクロス集計結果

表3 「禁欲性志向・中庸型・即時性志向」とスポーツ意識の調整された残差

		禁欲性志向	中庸型	即時性志向
鍛錬重視 N=704	賛成	12.7**	-2.1*	-10.2**
	どちらともいえない	-5.6**	3.7**	2.1*
	反対	-7.5**	-2.1*	8.9**
勝利重視 N=703	賛成	8.0**	-2.0*	-5.8**
	どちらともいえない	-4.0**	3.5**	0.7
	反対	-4.1**	-2.1*	5.7**
スポーツ中心 N=698	賛成	4.2**	-1.0	-3.1**
	どちらともいえない	-2.1	1.3	0.9
	反対	-3.1**	-0.4	3.4**
気軽さ重視 N=702	賛成	-9.2**	0.9	7.9**
	どちらともいえない	4.9**	0.9	-5.4**
	反対	7.6**	-2.8*	-4.7**

* < .05, ** < .01

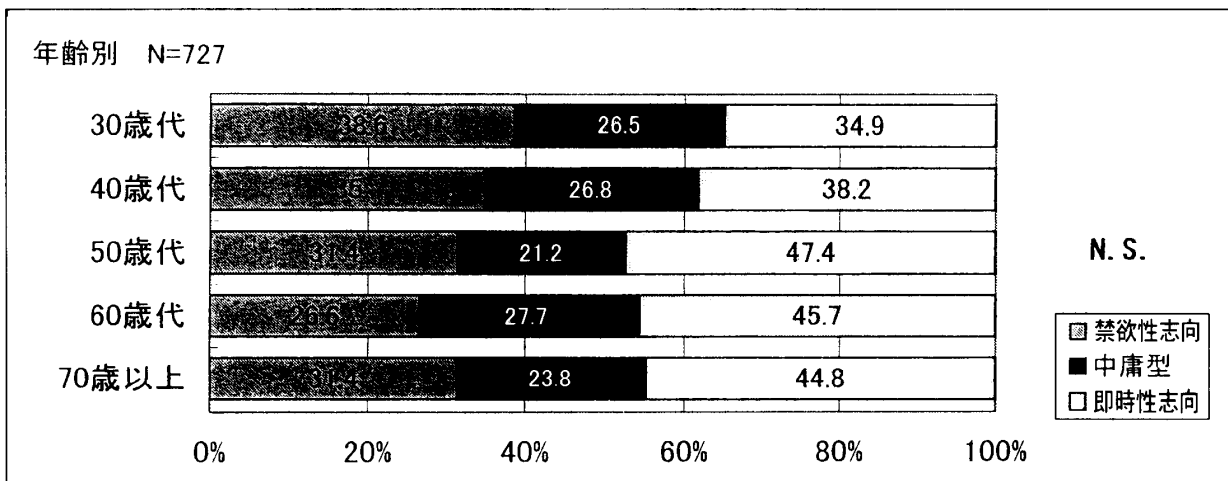
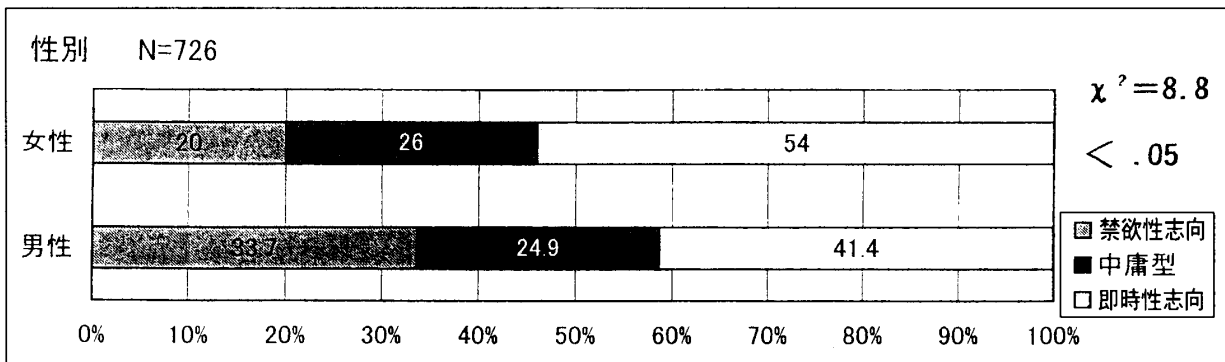


図4-B 「禁欲-即時」と性別および年齢別のクロス集計結果

ツ欲求の充足過程を通して何らかの世俗的な目的を達成しようとするグループ、さらにこれらのいずれにも属さないグループによって構成されている。こうしたスポーツ価値意識の分布傾向は、一流競技者、地域スポーツ参加者には認められないものである。

2) マスターズ陸上参加者は、日常生活をスポーツ中心に考え技術の向上と勝利をめざす「競技志向」よりも、スポーツを気楽に楽しもうとする「気楽さ志向」の方が高い割合を示した。

3) マスターズ陸上参加者は、男性よりも女性の方が「気楽さ志向」の傾向が強かった。

4) マスターズ陸上参加者は、年齢別によるスポーツ価値意識の違いは認められなかった。

すなわち、40歳以上のいずれの年齢層においても、「競技志向」よりも「気楽さ志向」の割合が高く、高年者においても中年者と同様の割合で「競技志向」をもった参加者が存在した。

これら4点のうち、以下ではマスターズ陸上においては「競技志向」よりも「気楽さ志向」の参加者の割合が高かった点に着目し、彼らがマスターズ陸上のどのような側面に惹かれているのかをマスターズ陸上の特性から考察していく。

4. 「気楽さ志向」の参加者を惹きつける全日本マスターズ陸上競技選手権大会の特性

マスターズ陸上において多くみられた、「気楽さ志向」の中高年者はマスターズ陸上のどのような特性に惹かれたのであろうか。この点に関して、以下にあげるマスターズ陸上の特性の三点から推察される。

まず、第一点はマスターズ陸上がスポーツ競技会の特性として逢坂²⁹⁾が指摘しているように、若者層の陸上競技の選手権大会と同等の運営水準でなされている点があげられる。

競技規則は、日本マスターズ陸上競技種目別基準とその年の日本陸上競技連盟規則が準用され、第一種陸上競技場が使用される。そして競技運営には日本陸上競技連盟の公認審判員があたる。大会における記録と順位は主催者である

日本マスターズ陸上競技連盟によって公認される。

このような、マスターズ陸上の運営水準の高さは、大会に対しては勿論、そこで出された競技成績に社会的信頼性を付与することとなる。自らも参加者である森田は、自己にとってのマスターズ陸上を勝敗目的のスポーツとしたうえで「勝てば周囲がほめるし、他人にも自慢できる」(森田²⁹⁾)と述べている。ここからは、競技志向の参加者にとって自己の勝利獲得や記録更新が他者に認められることが重要であることがうかがえる。マスターズ陸上の運営水準の高さは、競技志向の参加者にとっての望ましさとなるであろう。そして同時に、この特性は競技志向以外の参加者を惹きつけるものとなり得る。

それは「陸上競技を少しでも体験した者には憧れの国立競技場で一度でも土を踏んでみたい…(略)…多年の念願を果たしたいと考え、出場のため、やり投げと円盤投げの練習を始めることにした」(77歳, 男性, 「会報」3号, 1982.), 「この年になって国立競技場を始め, 全国の立派な陸上競技場に選手として出場できることは, まるで夢のような思い」(65歳, 男性, 同8号, 1988.) ということばから読み取ることができる。つまり, 第一種陸上競技場において高い運営水準のなかで競技を行うことは, 中高年者にとって憧れや喜びになる。それは, 中村²⁴⁾の述べるように, 参加者が「中高年者として別世界感覚の自覚を強要」されることなく, 若年者と同じスポーツを享受する感覚を味わうことができるからである。このことはマスターズ陸上に参加する多くの中高年者を惹きつけているものと考えられる。

第二点は, マスターズ陸上の陸上競技という種目特性があげられる。具体的には, 個人的スポーツ種目であること, 競技成績の評価が順位と記録という観点からなされること, そして走種目に限れば特別な施設や用具を必要としないことがあげられよう。

こうした種目特性は, 「競技志向」の参加者にとっては自己の目標設定や練習計画の立案を可能にし, の勝利獲得や記録更新への欲求をさ

らに高めることになるであろう。それは「勝利への道は、ただ漠然とやみくもに走るだけではなく、自分の体調に見合った絶ゆまぬ練習を続け、…効率的な走法を研究するとともに、それをこなせる体力を身につけることが大切」(60歳, 男性, 同8号, 1988.) ということばかりがわかれる。

しかし、同時にマスターズ陸上には「無理な練習は禁物で、生活のリズム、健康づくりとして(マスターズ陸上参加を)継続することに意義がある」(45歳, 男性, 同創刊号, 1981.) ということばかりわかるように、マスターズ陸上には参加継続を重視し、そのため自己の体調や生活にあわせて健康づくりのためにスポーツ活動を行いたいとする中高年者も存在する。こうした中高年者にとっては、個人種目であるという陸上競技の特性は、他者との関係に患わされることなく練習時間やスポーツ活動の内容、試合結果の評価など個人の判断で行なうことができ、望ましさとなる。また特別な施設や用具を必要としない種目特性も、中高年者に気軽なスポーツ種目としての印象を与えることになるであろう。

第三点は、マスターズ陸上は中高年スポーツの特性として、若年者の陸上競技の全国大会と異なる3点があげられる。すなわち、逢坂²⁹⁾の指摘にあるように、参加資格が競技能力によらず、下限年齢と日本陸上競技連合登録の有無のみによって定められている点、競技が5歳刻みの年齢別クラスで行なわれる点、競技規則に日本マスターズ陸上競技種目別基準が用いられ、器具の重量(砲丸, 円盤, やり)や高さ(障害競技におけるハードルなど)、距離(ハードル競走種目の距離あるいはハードル間の距離)について年齢が高くなるにつれて負荷の軽減がなされている点である。

マスターズ陸上には「60才台までなら、病気が回復し、故障がなれば今迄の記録を維持できるかもしれませんが、70歳を越え、老化速度が増してくると回復しても容易に元に戻りません」(75歳, 男性, 同9号, 1989.) といったように、加齢に伴う体力の低下を感じている中高

年者が参加している。身体的条件を考慮して設けられた競技規則や競技能力によらない参加資格などの、中高年スポーツとしての特性が、身体的不安を軽減することになるだけではなく、大会に「気軽に参加できる」印象を与えることになり、「気楽さ志向」の参加者にとっての望ましさとなると思われる。

以上指摘したように、マスターズ陸上における中高年者、とりわけ「気楽さ志向」の中高年参加者を惹きつけている要因は、若者感覚を他の中高年参加者とともに味わうことが可能なスポーツ競技会としての特性、自己の身体的条件や目的にあわせスポーツ活動が可能な陸上競技の種目としての特性、身体的不安を軽減させている中高年スポーツとしての特性によるものと考えられる。

Ⅲ. 高齢社会と全日本マスターズ陸上競技選手権大会参加者のスポーツ価値意識

1. 高齢社会における全日本マスターズ陸上競技選手権大会の意義

金子¹⁴⁾によれば、高齢社会をむかえたわが国において高年者は社会の「価値ある活動」から疎外される状況にあるという。それは、先端技術の開発が進む社会において、高年者がディヒトバルト(Dychtwald³⁾)のいう「老化恐怖症神話」のような、否定的高年者観で捉えられていることによる。

近年の生涯スポーツに対する関心の高まりも、その背景には否定的高年者観にもとづいた危機感があるものと思われる。つまり、高年者は社会的、経済的、身体的、精神的側面など多くの喪失を経験するグループであり、彼らにとってスポーツは健康や生きがい、仲間獲得に有効なものであるという捉え方である。

しかしその一方で、高年者に対しては医療技術、衛生環境向上によってイメージの転換がもとめられている。それは、金森¹⁵⁾や山口⁴¹⁾⁴²⁾、マクファーソン(Mcphersn¹⁹⁾)が述べるような、身体的に健康で経済的にも恵まれた活動的な高年者、あるいは杉原³¹⁾が述べるような、新たな

生活環境を作り出しそのなかで可能性をもとうとする「中高年の新人類」(杉原³¹⁾)の出現がみられるとの指摘からうかがえる。つまり現在進行している高齢社会は、否定的高年者観によって高年者を社会から疎外するシステムが存在する一方で、現実には従来の高年者観の枠に入らない、積極的に社会に働きかけを行なう高年者やそれをめざす中年者が出現しつつある。

中村²⁴⁾によれば、提供者側によって一方的に中高年者向けにルール変更されたスポーツが、必ずしも参加者に受け入れられていない状況もみられるという。これは、積極的に社会に働きかけを行おうとする中高年者の個別性や主体性を視野に入れることなくスポーツ提供に対して受動的な存在として捉えた結果、生じたものと考えられる。

ところで、本稿ではマスターズ陸上に「競技志向」の参加者よりも「気楽さ志向」の参加者が多く存在していることが明らかとなった。マスターズ陸上は「競技志向の中高年スポーツ愛好家の受皿」であると同時に「気楽さ志向の中高年スポーツ愛好家」にとっての余暇活動の場ともなっていることが示された。

本稿で明らかとなった多様なスポーツ価値意識は、マスターズ陸上参加者が既存のスポーツ種目、スポーツ提供の在り方に適応させるのではなく、自らのスポーツ価値意識にあわせたスポーツ活動を行なっていることを示したものである。そして、マスターズ陸上は多様なスポーツ価値意識をもつ中高年者の主体的なスポーツ活動に対して、そうしたスポーツ活動が可能な自由度を備えているともいえよう。

高齢社会の進展とともに、今後、活動的な中高年者が増加するものと推測される。マスターズ陸上の在り方は、これからの中高年者の主体的なスポーツ活動を可能にする自由度を他の中高年スポーツにおいても備えておく必要性を示唆している。そして多様なスポーツ価値意識をもつ中高年者が主体的にスポーツ活動を行えるよう検討され促されることが、今後の中高年スポーツの新たな価値と可能性を見出すことにつながると考えられる。

2. 高齢社会における全日本マスターズ陸上競技選手権大会の課題

大橋²⁷⁾は、各地域で親しまれていた家庭婦人のバレーボールが、日本体育協会による全国家庭婦人バレーボールとして開催されることによって、各チーム内で競技志向と非競技志向の分裂が生じたことを述べている。また、森川²¹⁾は卓球愛好会がクラブチームとして成熟していく過程で楽しみ志向と競技志向の成員間で問題が生じた事例を報告している。こうした問題は、一つのスポーツの普及・振興が進む過程で、スポーツ集団内に高度化志向(競技志向)が鮮明化した結果、生じた問題である。

マスターズ陸上では、本稿で明らかにしたように「競技志向」と「気楽さ志向」の参加者が混在していた。マスターズ陸上の発展がめざされ参加者数の拡大がはかれることになれば、「気楽さ志向」と「競技志向」の参加者間の葛藤も避けることはできないであろう。しかし高齢社会におけるマスターズ陸上の意義が、「気楽さ志向」、「競技志向」双方にとっての望ましさという柔軟性を内包している以上、葛藤を抱えながらも発展の道を模索することとなるであろう。

おわりに

マスターズ陸上参加者の競技志向の検証を行なった本稿の結果は、中高年者のスポーツ価値意識や態度の多様性や個別性を視野に入れたスポーツの在り方を検討する必要性を改めて示唆したものといえる。もちろん、この結果は今後さらなる検証が必要であろう。また、マスターズ陸上参加者が中高年者のなかでもごく限られた対象であることから、様々な中高年スポーツ参加者に対して調査をする必要がある。

今後は、詳細な分析が行なえなかった中庸型の意識内容の分析や高年者の競技志向の検討を行なうことが課題となる。その際にはスポーツ価値意識に影響すると思われる様々な要因、すなわち出生コーホートや現在のライフステージ、

過去のスポーツ経験などを視野に入れた分析、考察が残された課題である。

参考文献及び注釈

注釈：

- 1) 本稿では、中高年スポーツとして扱われているマスターズ陸上の参加者資格の下限年齢が30歳であることから、「中高年者」を30歳以上とし、「中年者」を30歳から59歳、「高年者」を60歳以上とした。なお、29歳以下の年齢層を「若年者」として扱った。
- 2) 「全日本マスターズ陸上競技選手権大会」は、1980年に全国組織として発足した「日本中高齢者陸上競技連合」の主催によって開催されている大会である。1980年に「第1回全日本中高齢者陸上競技選手権大会」(和歌山県紀三井寺運動公園陸上競技場)を開催した後、毎年会場を各都県に移しながら年1回開催され、1999年には第20回目を迎える。
- 3) スポーツ価値意識について上杉(1977)は、人間がスポーツに参加する場合、その行為は主体(人間)が客体(スポーツ)のもっている価値を認めた結果、行為としてスポーツ参加という形をとるとされる。したがってマスターズ陸上参加という行為もまた、その行為を選択した中高年者がマスターズ陸上のなかに自己のスポーツ欲求を満たすならかの価値を認めた結果、表出したものと捉えられる。そこで本稿におけるスポーツ価値意識は、「マスターズ陸上参加という行為を選択した中高年者が、スポーツの属性を望ましいと考える意識」と捉えることとする。
- 4) 上杉は、これらのスポーツ価値意識を世俗内禁欲型、アゴン型、レジャー型、レクリエーション型との名称を当て、四類型として整理している(上杉「大学生のスポーツ価値意識のパターンとその関連要因の分析」, 1987.)。本稿ではマスターズ陸上参加者のスポーツ価値意識の意味内容が、名称のもつ意味によって規定されるのを避けるため、I型からIV型という表記を用いることとした。

- 5) 日本中高齢者陸上競技連合編。会報 創刊号(1981), 第2号(1981)。日本マスターズ陸上競技連合編。会報 第3号(1982) - 第10号(1991)
- 6) スポーツ意識の14項目のうち「精神重視」「鍛錬重視」「自己実現重視」「努力重視」「気楽さ重視」「継続重視」「勝利重視」の7項目は、一流競技者および地域スポーツ参加者においてスポーツ価値意識の規定要因(上杉1990)に認められたものとして調査内容に採用した。また「健康重視」「スポーツ中心」「社交重視」「自由主義」「非日常志向」「自己顕示志向」「無理志向」の7項目は、マスターズ陸上競技連合発行の会報に掲載されたマスターズ陸上参加者の寄稿を参考にして設定した。

文献：

- 1) 浅沼道成(1990) 体育専攻学生に関する研究。体育・スポーツ社会学研究9。体育・スポーツ社会学研究会編。道和書院：東京：23-39。
- 2) 浅沼道成・森司郎(1991) 体育専攻学生のスポーツ価値意識に関する研究(Ⅱ) - 競技動機との関連から -。鹿屋体育大学研究紀要6。111. 118。
- 3) アードマン：奥山正司ほか訳(1995) エイジズム - 優遇と偏見・差別 -。法政大学出版会：東京 < Eardman B. (1990) Ageism : negative and positive. Springer Publishing Company >
- 4) 藤原健固(1981) スポーツ指向と社会。道と書院：東京。
- 5) 長谷川公一(1993) 産業化。金子勇・長谷川公一著。マクロ社会学。新曜社：東京, pp. 39. 68。
- 6) Hastings, D.W. Kurth, S. B. Schloder, M. and Cyr, Darrell (1995) Reasons for participating in a serious leisure career : Comparison of canadian and U.S. masters swimmers. International Review for the Sociology of Sport 30(1) : 101-120.
- 7) 樋口満(1990) 高齢者の体力。体育の科学

- 40(12): 918-923.
- 8) Hogan, P. I. and Santomier, J. P. (1984) Effect of mastering swim skills on older adults' self-efficacy. *Research Quarterly For Exercise and Sport* 55(3): 294-296.
- 9) 今村浩明・宮内孝知・武笠康雄 (1982) わが国競技者の価値意識に関する調査研究。千葉大学教育学部研究紀要 31(2): 37-56.
- 10) 岩岡研典 (1986) マスターズ・スポーツ。宮下充正・武藤芳照編。高齢者とスポーツ。東京大学出版会: 東京, pp. 212-237.
- 11) 秦泉寺尚 (1994) 平成5年度文部省科学研究費(総合A) 研究成果報告書: 47-56.
- 12) 川辺光 (1980) 日本人のスポーツ観の構造的性質。東京外国語大学論集: 251-269.
- 13) 金子勇 (1993) 高齢化。金子勇・長谷川公一著。マクロ社会学。新曜社: 東京, pp. 223-251.
- 14) 金子勇 (1995) 高齢社会—何がどう変わるか—。講談社現代新書。講談社: 東京, pp. 37-38.
- 15) 金森久雄 (1990) 高齢化問題研究の課題。金森久雄・伊部英男編。高齢化社会の経済学。東京大学出版会: 東京, pp. 3-10.
- 16) 小椋博・森川貞夫・枝村亮一 (1984) スポーツに対する態度, 特に勝利志向の分析—「スポーツへの社会化」に関する国際調査から—。スポーツ参与の社会学。体育社会学研究会編 体育社会学研究 6. 道和書院: 東京, pp. 57-68
- 17) 糸野豊・平澤薫編 (1977) 生涯スポーツ論—幼児・児童・青年・成人・高齢者のための—。プレスギムナスチカ: 東京
- 18) 丸山富雄 (1981) 日本の一流競技者のスポーツ観構造について—日本人のスポーツ観分析のための一試論—。仙台大学紀要13 : 1-21
- 19) マクファーソン: 山口泰雄訳 (1992) 高齢社会におけるスポーツと身体活動の意義。体育の科学 1, pp. 63-71 < Mcpherson, Barry D. Ph. D., (1991) Social significance of sport and physical activity in the aging society. >
- 20) 見田宗介 (1966) 価値意識の理論。弘文堂: 東京。
- 21) 森川貞夫 (1987) 地域に生きるスポーツクラブ。社会教育実践双書 3. 国土社: 東京, p. 167
- 22) 森田真積 (1987) 高齢者のスポーツ参加—こころの面から—。体育の科学38(4): 222-224.
- 23) 中島豊雄 (1988) 高齢者スポーツ。森川貞夫・佐伯聰夫編 スポーツ社会学講義。大修館書店: 東京, pp. 221-224.
- 24) 中村敏雄 (1994) 高齢者スポーツのルール修正について。体育の科学44(2): 101-104.
- 25) 生沼芳弘 (1988) スポーツの社会システム。森川貞夫・佐伯聰夫編 スポーツ社会学講義。大修館書店: 東京, p. 42
- 26) 小笠原祐次 (1985) 高齢者の生活と余暇。体育・スポーツ社会学研究会編 体育・スポーツ社会学研究 4. 道和書院: 東京, 141-155.
- 27) 大橋美勝 (1973) 現代スポーツの文化的考察。現代スポーツ論。体育社会学研究 2. 体育社会学研究会編。道和書院: 東京, 63-84.
- 28) 逢坂十美 (1993) 全日本マスターズ陸上競技選手権大会の分析 (1)—日本マスターズ陸上競技連合の現状—。四国学院大学論集83: 125-152.
- 29) 逢坂十美 (1995) 全日本マスターズ陸上競技選手権大会の分析(2)—全日本マスターズ陸上競技選手権大会の特徴—四国学院大学論集85: 149-170.
- 30) 佐竹靖弘 (1991) 日米マスターズ・スイマーの競技に関する意識研究。専修大学体育研究紀要14: 7-16.
- 31) 杉原隆 (1997) 中高年者の運動。体育の科学 47(9): p. 669
- 32) 高橋伍郎 (1986) マスターズスイミング。体育の科学36(6): p. 463
- 33) 多田納秀雄 (1988) スポーツ活動の実態と価値意識に関する国際比較研究(1)。健康科学 10: 91-101.
- 34) 田中敏 (1989) ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法。教育出版: 東京。
- 35) 土田昭司 (1994) 社会調査のためのデータ分析入門。有斐閣: 東京。

- 36) 上杉正幸 (1977) 価値意識論の方向性。スポーツ参与の社会学。体育社会学研究六 道
和書院：東京，193-211.
- 37) 上杉正幸 (1983) スポーツ価値意識の類型
化に関する一試論。香川大学教育学部研究報
告 I 59.
- 38) 上杉正幸 (1986) 大学生のスポーツ価値意
識について(5)－数量化によるパターン分類
－香川大学教育学部研究報告 I 67：21-35.
- 39) 上杉正幸 (1987) 大学生のスポーツ価値意
識のパターンとその関連要因。子どものス
ポーツを考える。体育・スポーツ社会学研究
編。体育・スポーツ社会学研究 6. 道和書
院：東京，pp. 195-213.
- 40) 上杉正幸 (1990) スポーツ価値意識のパター
ンとその規定要因に関する研究。昭和62・63・
平成元年度科学研究費補助金（一般 C）研究
成果報告書。
- 41) 山口泰雄 (1988) 高齢者のスポーツ活動と
その生活構造。体育の科学38(7)：507-513.
- 42) 山口泰雄 (1997) 中高年者のスポーツ実施
－現状と課題－。体育の科学47(9)：674-680.
- 43) 財団法人日本陸上競技連盟編 (1992) 陸上
競技指導教本－基礎理論編－。大修館書：東
京。